

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530647

研究課題名（和文） 障害者の継続的就労を実現する継続支援ロジックと方法の開発

研究課題名（英文） Establishing the logic and method of seamless support for continuous working in the person with disability

### 研究代表者

望月 昭（MOCHIZUKI AKIRA）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：40129698

### 研究成果の概要（和文）：

障害のある生徒と成人における継続的就労を支援するシステムを以下の3つの点について実証的に検討した。すなわち、(1) 当事者のベストパフォーマンスをひきだすための援助方法を含めたポートフォリオの作成と運用、(2) 個別の当事者の行動成立に必要な援助内容を同定するためのシミュレーション設定の効果、(3) 当事者自らが自分の行動成立のための「自己管理行動」の支援方法の検討、である。

### 研究成果の概要（英文）：

This research studied the support systems for continuous working in the individuals with disabilities from three aspects as follows, (1) developing the format and management system of “portfolio” which includes the necessary support conditions for the individuals, (2) analysis of the effects of “simulation setting” which is built for identifying the variables which bring out the full-potential of individuals, and (3) finding the support methods of self-management which enable to conduct his/her own behavior in each individuals.

### 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：対人援助学

科研費の分科・細目：社会学、社会福祉学

キーワード：継続的就労、学生ジョブコーチ、キャリアサポート、セルフマネジメント、特別支援学校、移行施設、汎用シミュレーションショップ、対人援助学

#### 1. 研究開始当初の背景

障害者の就労に関わる当事者のスキル獲得の研究や実践報告はこれまでも数多く発表されてきている。また現場の就労やジョブコーチ育成についての文献も内外で数多く刊行されている。さらに障害者就労における課題・業務分析に関わる機能分析に関する研究もテキストとして刊行されている

（Shepherd,2001）

しかし、これらは個別職場に対する適応方法が中心であり、必ずしも学校、企業、行政などの地域セクターの連携や、学校時代から就労継続に至る継続した支援を行う包括的な方法を提供しているとは言い難く、継続的就労の実現に向けたセクター間の効率的支援連携のためのロジックや具体的方法の検

討は不十分である。

われわれは、「援助」(新しい環境設定の開発)、「看護」(環境設定の定着のための要請)、「教授」(それらを前提とした指導)という3つの作業連関を想定した「対人援助学」モデルのもとに、学生チーム(学生ジョブコーチ)による就労支援の活動を行ってきた。そこでは、特別支援学校高等部生徒や福祉施設に在籍する利用者を対象に、企業実習(施設外支援を含む)や一般就労の場において、既存の職業的ジョブコーチでは対応し難い、卒業直後の移行や長期に亘る就労支援を通じて、継続的就労に必要な「援助設定」(人的・物理的支援環境)や「教授方法」の有効性の証明を行い、その情報を企業・学校に提供(「援助」)し、セクター間の仲介的な機能を果たしてきた(望月,2010;中鹿,2010)。

## 2. 研究の目的

上記したような研究活動の結果として、継続的な就労支援を実現する上で、現状では、学校、福祉施設、そして受け入れる企業においても、支援方法、当事者に関する情報蓄積、情報移行の方法、さらに個別の個人における目標設定の置き方それ自体にも改善すべき学術的・実践的課題が残されていることが明らかになった。

そこで当研究においては、そうした課題を、京都市の特別支援学校、市内の移行施設等と連携して、1)個別個人の就労継続に必要な「援助設定」を含んだポートフォリオの作成とその運用、2)より精緻に就労スキル獲得と維持に必要な援助方法を、個別個人において同定するシミュレーション設定(疑似店舗)の機能の検討、3)そのように特定個人のために構造化された環境下で、単なる個別的就労作業スキルの獲得だけではなく、自発的に自らの作業内容を「カイゼン」したりスケジュールを自ら作成するといった「自己管理行動」(Self-management Behavior)を促進する援助(教授)設定を実証的に検討する。

さらに移行施設成人を対象として、4)職場における自己管理のひとつとして、参加者自らが他のメンバーの職務スキル獲得に対して「支援者」として行動することができるかを検討する。

## 3. 研究の方法

(1)対象者：特別支援学校2校に在籍する軽度の知的障害のある高等部3年生徒3名、および中度の知的障害のある1年生の生徒1名。成人については、移行施設に在籍する軽度の知的障害のある利用者4名を、個別もしくはグループとして対応した。

(2)支援者(実験者)：筆者と研究分担者および大学院生と学部学生からなる「学生ジョブコーチグループ」であった。

## (3)就労実習のフィールド

一般事業所における就労内容：高等部生徒(3年生)においては地域のホームセンターにおける店舗のバックヤードおよび品出しなどの業務。移行施設における成人は、市内の宿泊施設における清掃業務を行った。

構造化されたシミュレーション設定での就労支援：高等部生徒3名および移行施設利用成人(上記とは別人)1名は、大学校舎内に建造された喫茶店仕様のシミュレーションショップ(Café Rits)とそのデリバリー業務については当該校舎外のキャンパス全体が使用された。ショップは、ホールと厨房に分かれ、レジスターと電話、ファックスのあるカウンターが置かれている(下図参照)。



ホール部分は全20席ほどの大きさで、対象者は接客業務(注文受付、厨房への伝達、配膳、下膳)を行い店長と厨房担当には学生があたった。対象者のジョブコーチ役としては、別の学生が専属につく他、適宜店長も指示を出した。客はすべて学生(あるいは教員)であらかじめ注文内容から支払に使う貨幣まで計画された内容でその役割を行った。

## (4)一般的な支援方法

目標設定：模擬店舗での実習を行った対象者については、当事者のそれまでの経緯に関して、過去の実習において記録された対象者のパフォーマンスから、「どのような条件(援助・教授設定)」があれば「どのような行動が可能か」、そして「その結果どのようなフィードバックがあるか」という三項随伴性(three term contingency)を基本としたポートフォリオ(「できますシート」)を作成し、新たな職場(模擬喫茶点)において、どのような作業が可能であるかが計画された。この計画策定には、対象者の保護者、学校教員も参加した。

現場での支援：各職場において、学生ジョブコーチは、当該職場の業務について課題分析表を作成し、それをもとに、プロンプトとフェイディングによる系統的教示

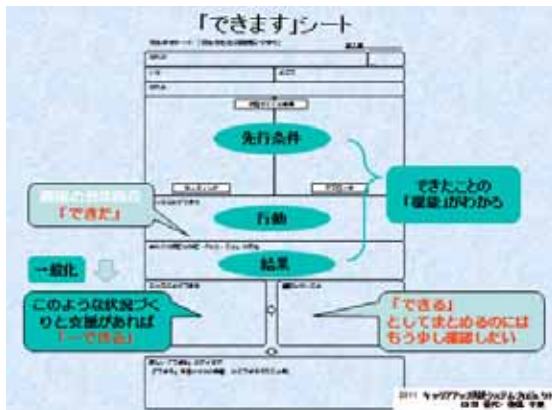
(systematic instruction)による支援を行った。記録は、専任記録者が課題分析表へのチェックとVTRの撮影によって行われた。また一部生徒については、作業従事の前に熟達

者および自らの作業ビデオを観察するビデオ・モデリングの方法が用いられた。

実習から得られた情報の蓄積と移行：各職場における実習経過の結果は、当事者のポートフォリオ（「できますシート」）を新たに更新したものとして整理され、と同様に、どのような条件（援助・教授設定）があれば当該の職務遂行が可能であったかの詳細情報が記された。このポートフォリオを含んだ実習成果は、関係者（生徒の場合は保護者や学校教師）に「ケース報告会」において報告され、されに関係者の合議の上で、「できますシート」が更新され、次なる実習の内容や業務内容が計画された。特別支援校生徒においてはこれらの内容は、個別の指導計画などの既存の情報システムに盛り込まれた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 個別個人におけるポートフォリオの書式



上図は、2010年から開始された特別支援学校生徒に対して作成されたポートフォリオ（「できます」シート）の書式である。実習等を通して直接観察された具体的な行動事例（「できた」）と、その先行条件、結果を記載し、より一般的にまとめられる「できる」の可能性を記述したうえで、それを確認するための試みの提案（確認したいこと）そしてそこから想定させる新しい行動内容（新しい「できる」こと）への展開が記入できる。

確認したいこと、新しい「できる」ことについては、現状での「できたこと」の集積を関係者で討議し、次なる支援者が、前進的に実践を継続発展させる弁別刺激（手がかり）となることが意図されている。

この「できますシート」は、従来の「個別指導計画」と異なり、i) 具体的な行動の成立条件としての「先行条件」およびその際に必要な援助設定（支援ツールや人的プロンプトなど）と、その就労（実習）の場においてどのような結果事象がもたらされたかという、環境事象ごとの記述、すなわち「援助つきで『できる』」ことを具体的に記載する点、

ii) 「確認したいこと」「新しい『できる』の提案」といった、次なる展開を関係者のあいだで討論してキャリアアップ支援を促進させる援護的機能を持たせていること、

iii) そして言うまでもなく「個別の指導計画」よりも、具体的な支援のプロセスを含めた行動の記述を累積していける、という特徴を持つ。

この「できますシート」の書式については、これまでの就労実習での記録や、市内の特別支援学校における数年にわたる協議の結果、改良を重ねてきた共同制作物であり、N特別支援学校ではこの修正版が、就労移行だけでなく、小学部、中学部、高等部のいずれの学部でも制作され、学部、学年を超えた、個別の生徒の継続的支援のためのツールとして実装するに至っている。

移行支援施設の利用者については、このポートフォリオと作業中のパフォーマンスを撮影したビデオを編集したものが、次なる就労実習へのプロモーションとして利用された。また別の対象者において、本格就労の移行書類として、以下の(2)におけるシミュレーションに際して作成された「できますシート（キャリアシート）」が、履歴書として使用された。

##### (2) シミュレーションショップ(疑似店舗)における行動の記述

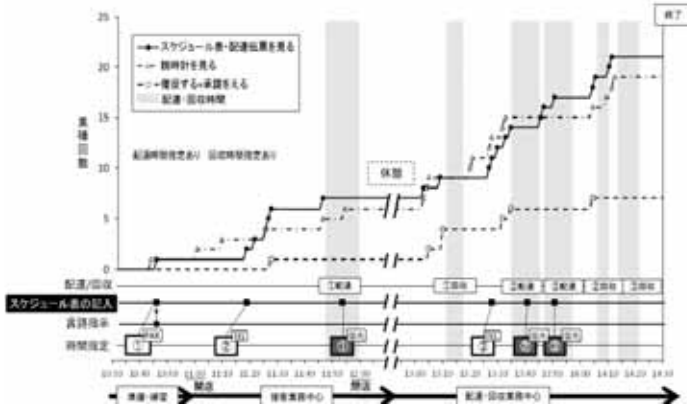
本研究の特徴として、障害のある個人（生徒・成人）における就労支援あるいは就労学習（実習）の支援として、学校内でもなく、実際の事業所（店舗）におけるOJTでもない、構造化された疑似店舗におけるシミュレーションにおいて、参加者の潜勢力を最大限に引き出し、またそれに必要な援助設定を実証的・分析的に同定することが挙げられる。

そこでは、作業内容、客の行動など、可能な限り当該の対象者の現状の「できる」に即し、かつ「新しい『できる』」の可能性を見極める設定が計画的に準備された。

今回の模擬店舗は、「喫茶店」仕様を採用したが、それは清掃、開店準備などのルーティーン作業に加え、金銭の計算ややりとり、また絶えず顧客の行動を注意深く観察しそれに対応する接客という社会的行動が求められ、これらは将来の就労の多くの職種において応用可能性が高いと判断されたからである。

また本研究では、目的(3)で触れたように、個別の職務上のスキルに加えて、対象者自らが、作業内容をやりやすくするために、自らが作業環境を変更するといった広義の自己管理行動の出現を促進する設定をその獲得プロセスとともに検討した。具体的には、予定変更などにも対処できるようなスケジュール表の記入や、それに従った作業開始な

どを、自らが行う状況設定の検討である。ここでは店内の接客業務を並行して、電話によるデリバリーの時間指定や回収時間の設定などについて、対象者がスケジュール表にその予定を自ら書き込み、作業手順の変更に対応できるかが検討された。下図は、特別支援学校高等部の生徒が、そうしたスケジュール管理の獲得の過程を示したものであるが、デリバリーに関して、注文電話の後すぐに配達するという容易な段階から、配達客の希望などにより当初のスケジュールを変更して対応するといった難度の高い課題へ、対処していく過程を示したものである。実践前は、急なスケジュールの変更は、対象者にパニックを誘発させる、などの日常場面からの報告もあったが、対象者自身が積極的にスケジュール変更に参加する(=自己管理)という方法を導入すれば、そうした問題も回避できる可能性が示された。



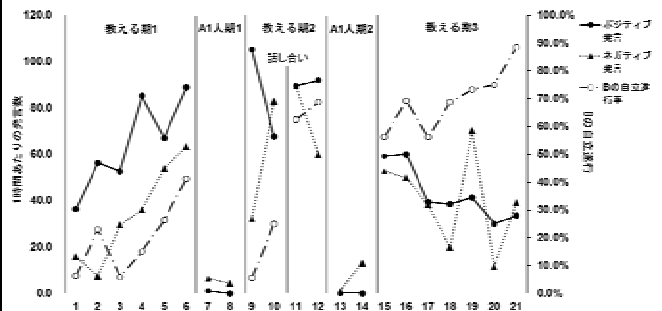
### (3) 移行施設利用者によるピアサポートの可能性

障害者(とりわけ知的に障害のある個人)への就労支援にあたっては、従来、当該業務の課題分析、そしてそれに基づいた全課題提示法と系統的教示といった方法が支援方法として一般的にとられてきた。本研究においては、これまで述べたように、個別の課題スキルに加えて、対象者自らがスケジュールの調整を行うなどの自己管理(Self-management)の可能性を検討してきた。このことは単純労働の繰り返しではなく、作業の裁量権の拡大という意味でのキャリアアップをとおして、当事者の就労自体への関与を高め継続的就労の実現を促進しようというものである。

その自己管理の「延長」のひとつとして、他の仲間にも業務遂行について対象者自らが支援するという設定が考えられる。そのことは自らの業務の改善や工夫にも反映することも期待できる。本研究では、移行支援施設の成人グループによる宿泊施設の清掃業務の支援を行ってきたが、業務分析、対象者グループ内での業務改善のミーティングなど

に加えて、最終段階として、当事者メンバーによる新人の指導という設定の中で、合理的かつポジティブな対応が可能か、そして指導者自らの作業にも影響を及ぼすかが検討された。

下図は、成人の対象者Aが、新人に宿泊施設でのベッドメイキングを教える際の、指導場面におけるポジティブな発言(相手の作業を褒めたり励ましたりする)とネガティブな発言(他人や自分を非難・卑下するような発言)の単位時間あたりの発現頻度を、条件(教える場面かそれ以外の場面かなど)ごとにその推移を表記したものである。



対象者Aは、平素、自分にも他人にもネガティブな発言が目立ち、施設内でも問題になっており、Aが清掃業務を「教わる側」であった時期にもジョブコーチとのやりとりの中で自らを卑下するような発言が多かった。しかし、いったん「教える立場」になった場合には、図からもわかるように、ポジティブな発言が増大することがわかる。この変容は、この実習場面にとどまらず、施設にもどっても継続したという報告が職員からもあった。ピアサポートという就労における方法は、「教える」という役割設定が、当該職場へのひいては就労自体への積極的自己関与や継続に有効な方法であることを示唆している。

### 成果のまとめ

本研究では、障害(特に知的)のある生徒・成人を対象として継続的就労に向けた支援の方法について、1)当事者の「できる」情報の蓄積・移行の方法、2)また職務内容の設定自体については、従来、とすると「単純労働」の切り出しと思われがちであったものを、より当事者自身で職務方法の改善などを行うような「自己管理行動」の獲得とその支援方法について検討した。

その結果、障害のある個人においても、様々な側面から、自らがより積極的に職務のありかたに参加しそのことで仕事遂行自体が、当事者のQOLを高める(就労がそれ自体が正の強化で維持される)ような支援の可能性が示された。このことは、従来の就労のための教育方法を見直す必要を示しているのではないだろうか。

## 5. 主な発表論文等

### [雑誌論文](計7件)

- 著者名: 朝野浩、論文標題: 高等部における進路指導と職業教育の現状と課題  
雑誌名: 特別支援教育研究、査読: 無、巻: 664、発行年: 2012、ページ: 10-13
- 著者名: 望月昭、論文標題: 対人援助学の観点から障害のある子どもの「生命倫理」を考える-「これ」があれば「できる=生きられる」論理の徹底 特集 障害と生命倫理、雑誌名: 日本発達障害福祉連盟 福祉連盟ニュース、査読: 無、巻: 5008、発行年: 2012、ページ: 8-10
- 著者名: 林炫廷・中鹿直樹・望月昭、論文標題: 知的障害のある生徒に対する写真撮影を利用した報告言語行動の増大、雑誌名: 立命館人間科学研究、査読: 有、巻: 22、発行年: 2011、ページ: 87-96
- 著者名: 朝野浩、論文標題: Topic14「社会の形成者, 共生社会の一員とはどのように考えればよいか」、雑誌名: 新しい教育課程と学習活動 Q&A 特別支援教育 [知的障害教育]、査読: 無、巻: 78、発行年: 2010、ページ: 15-17
- 著者名: 朝野浩、論文標題: 中学部教科「職業・家庭」、雑誌名: 特別支援学校新学習指導要領ポイントと授業づくり 特別支援教育 [知的障害・発達障害]、査読: 無、発行年: 2010、ページ: 20-21
- 著者名: 朝野浩、論文標題: 高等部「職業」、雑誌名: 特別支援学校新学習指導要領ポイントと授業づくり 特別支援教育 [知的障害・発達障害]、査読: 無、発行年: 2010、ページ: 52-55
- 著者名: 朝野浩、論文標題: 個別の指導計画、個別の教育支援計画、雑誌名: 特別支援学校新学習指導要領ポイントと授業づくり 特別支援教育 [知的障害・発達障害]、査読: 無、発行年: 2010、ページ: 90-91

### [学会発表](計16件)

- 発表者名: 朝野浩、発表標題: 「障害のある子どもの生きる力と保護者への生涯にわたる支援 = 個別の包括支援プランの策定意図とその後の活用状況及び新たな取り組み」、学会名: 立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構・人間科学研究所主催「当事者主体の学びについて - 「ヒトマト」などの実践事例から考える」シンポジウム、発表年月日: 2013年3月22日、発表場所: 立命館大学(京都府)
- 発表者名: 望月昭、発表標題: 指定討論、学会名: 立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構・人間科学研究所主催「当事者主体の学びについて - 「ヒトマト」などの実践事例から考える」シンポジウム、発表年月日: 2013年3月22日、発

- 表場所: 立命館大学(京都府)
- 発表者名: 中鹿直樹・森大典・尾西洋平・望月昭、発表標題: 知的障がい者の分類作業における作業量・作業精度向上に対するセルフ・チェックの効果 信号検出理論に基づく分類カテゴリーの利用、学会名: 日本行動分析学会第29回年次大会、発表年月日: 2012年9月1日、発表場所: 高知リハビリテーション学院(高知市)
- 発表者名: 中鹿直樹・川村徹也・尾西洋平・望月昭、発表標題: 知的障がい者の就労場面における役割設定の効果、学会名: 対人援助学会第4回年次大会、発表年月日: 2012年12月8日、発表場所: 神奈川県立保健福祉大学(横須賀市)
- 発表者名: 望月昭・中鹿直樹・尾西洋平・林炫廷・乾明紀、発表標題: 「学生ジョブコーチ」による障がい者就労支援の役割、学会名: 対人援助学会第4回年次大会、発表年月日: 2012年12月8日、発表場所: 神奈川県立保健福祉大学(横須賀市)
- 発表者名: 尾西洋平・中鹿直樹・林炫廷・太田隆士・乾明紀・望月昭、発表標題: 累積記録を用いたスケジュールの自己管理行動の表現、学会名: 対人援助学会第4回年次大会、発表年月日: 2012年12月8日、発表場所: 神奈川県立保健福祉大学(横須賀市)
- 発表者名: 小島遼・中鹿直樹・乾明紀・望月昭、発表標題: 障がい者の就労場面において他者に教える行動がもたらす効果、学会名: 対人援助学会第4回年次大会、発表年月日: 2012年12月8日、発表場所: 神奈川県立保健福祉大学(横須賀市)
- 発表者名: 脇坂洋介・朝野浩、発表標題: 重度重複知的障害高等部生徒の「できる」を発見し「できる」につなぐ - 作業学習におけるマッチングをとおして、学会名: 対人援助学会第3回年次大会、発表年月日: 2011年11月2日、発表場所: 立命館大学(京都市)
- 発表者名: 木戸彩恵・朝野浩、発表標題: 「当事者性」を主体とする「連携」の再考、学会名: 対人援助学会第3回年次大会、発表年月日: 2011年11月2日、発表場所: 立命館大学(京都市)
- 発表者名: 中鹿直樹・望月昭・朝野浩・サトウタツヤ・寺崎幸子・木戸彩恵・堀田正基・井上学、発表標題: 障がいのある個人の継続的支援について 障害児支援の強化に向けた福祉と特別支援教育における連携に関する調査、学会名: 対人援助学会第3回年次大会、発表年月日: 2011年11月6日、発表場所: 立命館大学(京都市)
- 発表者名: 辻岡誠也・土田菜穂・森大典・尾西洋平・林炫廷・中鹿直樹・望月昭、発

表標題：大学内模擬喫茶店舗における特別支援学校生徒の就労実習 ビデオモデリングによる「できること」の自己評価指導、学会名：対人援助学会第3回年次大会、発表年月日：2011年11月6日、発表場所：立命館大学（京都市）  
発表者名：望月昭・中鹿直樹・林炫廷・乾明紀、発表標題：キャリアアップのための「アクティブ・シミュレーション」の場としての大学の活用、学会名：対人援助学会第3回年次大会、発表年月日：2011年11月6日、発表場所：立命館大学（京都市）  
発表者名：林炫廷・太田隆士・中鹿直樹・望月昭、発表標題：障害のある人への継続的な就労支援を行うための「できること」についての情報構築 特別支援学校の教員と保護者の連携の下での「できませんシート」の書式の検討、学会名：対人援助学会第3回年次大会、発表年月日：2011年11月6日、発表場所：立命館大学（京都市）  
発表者名：山口真理子・中鹿直樹・望月昭、発表標題：知的障害のある成人における施設外支援に対する学生ジョブコーチ支援セルフ・マネジメント行動の形成・維持、学会名：日本行動分析学会第28回年次大会、発表年月日：2010年10月10日、発表場所：神戸親和女子大学（神戸市）  
発表者名：青山祥子・伊藤亜里沙・九野和也・中鹿直樹・望月昭・木ノ戸昌幸・田谷隆行、発表標題：学生ジョブコーチによる障害者の主体的な業務改善を支える就労支援の方法の検討 - 「やりがい」をもって働き続けるために -、学会名：対人援助学会第2回年次大会、発表年月日：2010年11月6日、発表場所：立命館大学（京都市）  
発表者名：中鹿直樹・山口真理子・望月昭、発表標題：障害者就労場面における、福祉施設・企業・大学間の連携作業の機能的分析 - 立命館大学学生ジョブコーチの実践から -、学会名：対人援助学会第2回年次大会、発表年月日：2010年11月6日、発表場所：立命館大学（京都市）

〔図書〕(計3件)

著者名：望月昭（編集代表） 出版社名：晃洋書房、書名：対人援助学の到達点、発行年：印刷中、総ページ数：213  
著者名：望月昭（編集代表） 出版社名：晃洋書房、書名：対人援助学を拓く  
発行年：印刷中、総ページ数：361  
著者名：MOCHIZUKI, Akira., & NAKASHIKA, Naoki、出版社名：Ritsumeikan University  
書名：Creating New Science for Services: An anthology of Professor of Graduate School of Science for Human Services., 発行年：2011、総ページ数：201

〔産業財産権〕  
出願状況（計0件）  
取得状況（計0件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

望月 昭 (MOCHIZUKI AKIRA)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号：40129698

(2) 研究分担者

中鹿 直樹 (NAKASHIKA NAOKI)  
立命館大学・文学部・講師  
研究者番号：20469183

藤 信子 (FUJI NOBUKO)  
立命館大学・応用人間科学研究科・教授  
研究者番号：30388102

宮浦 崇 (MIYAURA TAKASHI)  
九州工業大学・学習教育センター・准教授  
研究者番号：30509295

朝野 浩 (ASANO HIROSHI)  
立命館大学・教職教育推進機構・教授  
研究者番号：70524461

(3) 連携研究者  
なし